「乳母物語」の娯楽性と倫理性

足　立　万寿子

（1）

イギリス・ヴィクトリア朝時代(1837-1901)、人々はクリスマスの日に教会の礼拝を済ませると家族、親戚、親しい友人たちが集まって、ご馳走、ゲーム、素人芝居、歌、踊り[1]、また、幽霊話[2]にも興じたという。その楽しみに話題を提供するように、週刊誌『ハウスホールド・ワーズ』(*Household Words*) 1852年度クリスマス特別号[3]には、幽霊物語が2作掲載されているが、そのうちの1作がギャスケル夫人(Mrs Gaskell)の「乳母物語」("The Old Nurse's Story")である。

ギャスケル夫人自身幽霊物語が好きであったようである。シャーロット・ブロンテ(Charlotte Brontë)がギャスケル家を2度目に訪問した時、夫人が例によって夜寝る前に幽霊物語をしようとしたら、シャーロットは夢を見て眠れなくなりそうだから止めてほしいと言ったという[4]。また、夫人は、親友への手紙の中で「幽霊を見たのよ。本当よ」(I SAW a ghost! Yes I did)[5]と知らせているところを見ると、夫人は幽霊の存在を信じていたのかもしれない。

（2）

『ハウスホールド・ワーズ』1852年度クリスマス特別号に掲載された10の物語の中で現在多くのものは忘れ去られてしまっているが、「乳母物語」はその後100年以上を経てもなお人々に読み続けられている。このように人気を保っている要因のひとつは娯楽小説、幽霊物語としての面白さ、もうひとつはこの短篇の根底に流れている、真摯で普遍的な思想ではないか、と私は考える。このように考える根拠をこの小論で明らかにしていきたい。

（3）

幽霊物語が娯楽読物として成功するには超自然現象に信憑性があること、加えて、読者に与える恐怖の度合いが大切となろう。これらについて小説技法の諸点からこの物語を分析していきたい。

まず、視点の問題を考察したい。この短篇の語り手は乳母のヘスター(Hester)である。ヘスターが仕えている女主人ロザモンド(Rosamond)が幼いころ、幽霊の犠牲になりそうになった恐ろしい事件が起きる。時経て、ヘスターはこの事件をロザモンドの子供たちに話して聞かせることになるが、これがこの短篇の現時点という設定になっている。

ヘスターは、ファーニヴァル(Furnivall)領主家の親戚のロザモンドが誕生した時からロザモンドに仕え、そして、ロザモンドが結婚しても主人の元を離れず、ロザモンドの子供たちの世話もしている。このように母子二代にわたって仕えてきたこと、また、ロザモンドを必死で幽霊から守ろうとしたことから、ヘスターは責任感があり、信頼がおけ、また愛情深い女性であることが窺える。このように誠実な人が空想による潤色を加えたり、嘘を交えたりはしないであろうと推測され、ヘスターが語るならば、現実には信じがたいような話も真実味を帯びてくる。つまり、この超自然現象を扱った幽霊物語の信憑性が増すことになる。

さらに、ヘスターはファーニヴァル家の人々から見ると局外者であるので、この一家の呪いについては客観性を持って描写できる立場にあると考えられ、ギャスケル夫人が選んだこの視点は、超自然現象に真実味を与えるのにさらに効果的であるといえよう。

次に、構造について考察したい。「乳母物語」は、大きく分けると「現在」と「過去」の2重枠構造になっている。「現在」は乳母が子供たちに昔の出来事を話してやっている現時点の世界で、これが短篇の「外枠」になっている。「過去」は現時点から一昔前に遡った、ロザモンド幼少時の幽霊事件が起きた時点であって、これが「内枠」になっている。さらに、この「内枠」の中には、老ファーニヴァル卿、その長女のモード(Maude)・ファーニヴァル、次女のグレイス(Grace)・ファーニヴァルの3人の間で確執が生じて、その結果、モードとモードの不義の子が凍死する事件が含まれている。これを「最内枠」と名づけたい。

この「現在」の枠と「過去」の枠をつないでいるのが乳母ヘスターで、

全体を通しての語り手となっているが、「最内枠」はファーニヴァル領主家に仕えるドロシーが語り、ヘスターが聞くという形式を取っている。語り手が直接経験できないことは他の作中人物の口を通して語らせるこの手法は、「異父兄弟」(“The Half-Brothers”)など夫人の他の短篇にも見られるように[6]、視点の統一を乱さずに、しかも、事件の経過をごく自然に手際よく読者に伝える巧みな小説技法と言える。

次に、背景について考察すると、「外枠」である「現在」はイングランドの南部に設定されており、一方、「最内枠」を含め、「内枠」である「過去」は北部に設定されている。乳母の故郷と乳母が初めて仕えた牧師館はイングランド北部のウェストモアランド(Westmorland)州にあり、牧師館の牧師夫婦が亡くなって、乳母と遺児ロザモンドが引っ越していくファーニヴァル領主館はさらに北部の、スコットランドに隣接するノーサンバーランド(Northumberland)州にある。イングランド北部の気候は厳しい。夏でも雨が降れば寒く、ましてや、冬は寒風吹きすさび、雪も深い。これに対して、南部はおだやかである。温和な南部という「現在」の中にいる子供たちが、厳しい北部という「過去」の中に出没する幽霊の物語を聞く設定になっているので、その恐怖感は一層つのることになると思われる。

しかも、北部は魔女やその他超自然的存在の伝説が豊富なところである[7]。さらに、ファーニヴァル領主館の周りの鬱蒼たる樹木。何代も前からの骨董品や肖像画が置かれ、迷路のようになった薄暗い館の内部。これらの設定は幽霊物語にはまさにうってつけであり、恐怖感を増すのに効果を発揮している。

次に、事件の展開方法について見てみたい。物語に出てくるすべてのことが、この短篇の大団円——老ファーニヴァル卿、モード、モードの子、グレイスのそれぞれの幽霊がすべて、ヘスターと幼いロザモンドの前に姿を現わす場面——に向けて集中するように無駄なく緻密に配置されている。例えば、初めてヘスターとロザモンドがファーニヴァル領主館に着いたときの、玄関ホールの詳細な描写がすべて、その後に展開する事件と密接に結びついている。玄関ホールの西の壁に造りつけになっている大オルガン。これは、後に、幽霊となった老ファーニヴァル卿が弾いていると言われているオルガンの響きの伏線となっているし、また、大団円の開始の合図にもなっている。東翼への開かずのドアは、モードとその子の存在、並びに、この母子の不幸

な運命を暗示し、さらに、最後の山場への伏線となってる。玄関ホールの大シャンデリアと大暖炉も、大団円で、「青銅製の大シャンデリアにはすっかり火が灯っているように見えるのに、ホールは薄暗いのです。大暖炉の火は炎をあげて燃えているのに、少しも熱くないのです」(the great bronze chandelier seemed all alight, though the hall was dim, and that a fire was blazing in the vast hearth-place, though it gave no heat)[8] と描写されているように、幽霊が出現する恐ろしい雰囲気を巧みに作り出すのに使われている。また、丘の中腹に生えている２本のヒイラギの老木は、幼いロザモンドが雪の日行方不明になり、ようやく発見される事件、グレイスの胸をかきむしられるような悔恨、不義が発覚し家を追い出されたモードとその子が凍死した事件、と結びついていき、さらに大団円で登場するモードの幽霊の確認につながっていく。その他、この短篇の初めの部分で、若いころのグレイスについて、その肖像画の表情と服装が、

> Such a beauty she [Grace] must have been! but with such a set, proud look, and such scorn looking out of her handsome eyes, with her eyebrows just a little raised, ...; and her lip curled ....a hat of some soft, white stuff ... pulled a little over her brows, ...; and her gown of blue satin was open in front to a quilted, white stomacher.[9]

と、描写されている。その後、大詰の場面で、出現する幽霊のひとりが、

> That figure was very beautiful to look upon, with a soft, white hat drawn down over the proud brows, and a red and curling lip. It was dressed in an open robe of blue satin.[10]

と描写されている。この両者の描写で、この幽霊がグレイスの幽霊であることが確認されることになる。つまり、グレイスの肖像画はこのための巧妙な伏線となっていたことが分かる。

また、ファーニヴァル家にかかった恐ろしい呪いの謎は、語り手ヘスターにより、少しずつ解明されていくが、視点が厳密にヘスターだけに置かれているため、大団円までサスペンスが巧みに維持されていく。

このように恐怖を最後の一点に集中させていく事件の展開方法は読者の

興味を惹きつけて離さない誠に優れた手法であると言えよう。

最後に、物語にリアリティーを与えるものとして、ギャスケル夫人独特の、何げなく見えるが、一瞬にして事態を理解させ得る巧みな描写が挙げられる。例えば、グレイスの顔の皺について、「針の先で引いたような」(as if they [wrinkles] had been drawn all over it [her face] with a needle's point)[11] という短い表現で、読者は瞬時に、痩せて陰鬱そうなグレイスの顔を想像できよう。また、ヘスターがオルガンの蓋をあけて、中をこっそり覗き、壊れていることを知り、恐ろしさのあまり身震いする場面で、「前にクロスウェイト教会のオルガンの蓋を開けて中を見たことがありましたので」(as I had done to the organ in Crosthwaite Church once before)[12] と一言ヘスターに付け加えさせることで、田舎の下層階級のヘスターがオルガンの構造をたとえ僅かにせよ知っていても不思議ではないことを暗示し、リアリティーを出すのに効果を奏している。その他、ヘスターが、ロザモンドを幽霊の魔の手から守ろうとして必死で抱き締めていた様子は、「死んだとしてもまだ手だけはロザモンドさまを掴んで放さないでいたかもしれません」(If I had died, my hands would have grasped her [Rosamond] still)[13]、そして、「ひょっとすると手の跡がロザモンドさまの体に残ったかもしれません」(till I feared I should do her a hurt)[14] という表現に簡潔に表されている。これらの描写、表現がこの幽霊物語に現実感を与えていることは確かである。

このように見てくると「乳母物語」はスリルとサスペンスに富み、しかも、現実性も持った誠に面白い幽霊物語であって、娯楽読物として優れていることに納得がいくであろう。

(4)

続いて、この短篇の持つ思想を考察したい。イギリスでは、フィリップ・シドニ(Philip Sidney)も述べているように、古来、文学は「楽しませつつ、教えるもの」と考えられてきた[15]。ギャスケル夫人にもこの傾向は強く、作品に娯楽要素に加えて、自分の倫理観を盛り込もうとしていることが感じられる。そこで、夫人が「乳母物語」に織り込もうとしている倫理思想を考察していきたい。

この短篇の「最内枠」に登場するファーニヴァル領主家の人々の性格や行動、そして、この一家に起きた悲惨な事件を要約すると、こうなる。すなわち、老ファーニヴァル卿、その長女モード、次女グレイスはすべて高慢な人々である。そして、モードとグレイスは恋人の音楽師をめぐって嫉妬し合っている。モードは音楽師と密通し、密かに女の子を産む。グレイスは嫉妬のあまり姉への復讐を誓い、機会を見て父親に私生児のことを密告する。老ファーニヴァル卿は憤りのあまり不義をはたらいた長女とその子を雪の降る戸外へ放逐し、凍死させる。その後老ファーニヴァル卿は自分がとった無慈悲な処罰を悔いるあまり、あれほど好きであったオルガンをその日以来弾かなくなり、良心の呵責に苛まれて、間もなく亡くなってしまうが、幽霊となってオルガンを弾き続ける。モードは妹と父親の酷い仕打ちを恨むあまり、死んだ後、幼いわが子とともに幽霊となって犠牲者を求めて領主館周辺に出没する。グレイスは生きながらえるが、過去に犯した罪深い醜い行為——高慢と嫉妬に狂って姉に復讐し、罪もない子を死なせたこと——を生涯悔い続け、そして、立ち直れないまま死んでいく。

この要約から、ギャスケル夫人が読者に伝えようとした思想内容が読み取れよう。すなわち、七罪源[16]の中の高慢、嫉妬、憤怒の問題、その他、未婚の母と私生児の問題、罪と良心の呵責の問題などである。

これらの問題は夫人の他の作品[17]にもしばしば見られるが、「乳母物語」で夫人が特に採り上げようとした問題はグレイスに具現されているように思われる。その根拠は、グレイスが「最内枠」の中で語られる老卿一家のうち「内枠」の時代まで生き残った唯一の人であり、しかも夫人はグレイスについての描写は、ドロシーなど別の人物からの伝聞によらないで、語り手であるヘスターの直接の観察からなされるように設定して、グレイスという登場人物の重要性を際立たせようとしていることである。その他の根拠として、幽霊となる４人の登場人物のうち、老ファーニヴァル卿、モード、そして、モードの子は、それぞれ一旦地上の生命を亡くした後、幽霊となってさまよっているが、グレイスは生きている間に自分自身の幽霊が出現することが挙げられる。普通、幽霊は死後に出るものであるとすると、ギャスケル夫人はグレイスに特異性を付与していることになり、グレイスに特別の意味が込められているように思える。これらのことから、ギャスケル夫人がこの短篇で強調しようとした思想をグレイスという人物によって具現化しようとしてい

る、と考えることができよう。

若いころには嫉妬深く、無慈悲であったグレイスの老年になってからの言動を見ていくと、グレイスは、ロザモンドが行方不明になった時、寒さで震えながらも自分も一生懸命ロザモンドを捜そうとするし、ロザモンドがヒイラギの老木の下で発見されたとヘスターから聞いた時、グレイスは「ロザモンドを幽霊から守るように」(...keep her [Rosamond] from that child [the Spectre-Child])[18] と言い、人を愛する人間になっていることが示される。また、グレイスは、かつては姉を憎むあまり姉の子が虐待を受けるのを歓迎していたが、大団円では老ファーニヴァル卿の幽霊がモードの子の幽霊を松葉杖で打とうとしているのを見て、父親である老ファーニヴァル卿の幽霊に「罪のない子を打たないで」(...spare the little, innocent child!)[19] と懇願し、慈悲心を持つようになっていることが示される。

しかし、このように悔恨し、善を尽くそうとしても、すでに犯した罪を消し去ることはできないのである。グレイスは「あんなに何年も昔のことなのに、神はお赦しくださらない」(Wilt Thou never forgive! It is many a long year ago－)[20] と言って、かつての罪の重みに喘ぎ苦しむ。そして、それに止めを刺すかのように大団円で、若かったころのグレイスの姿をした幽霊が、生きているグレイスの眼前に現れ、その幽霊は松葉杖で打たれる子供の幽霊を平然と見ているのである。それを見て、グレイスは、醜い過去の自分の姿、すなわち、傲慢で、嫉妬深く、無慈悲で、復讐心に燃えていた自分の罪深さを再認識させられて、ショックのあまり全身麻痺し、倒れ、やがて死んでいく。

グレイスは、いかに良心の呵責に苛まれ、罪を悔い、償い、回心したとしても、一旦犯した罪は消えてなくなることはないということを、かつての自分自身の醜い姿を映した幽霊を見て、悟ることになるのである。グレイスのこの悟りは、この短篇の最後でグレイス自身が2回繰り返してつぶやく言葉「若いころのあやまち、老いても消せぬ」(What is done in youth can never be undone in age!)[21] に集約されている。ここで、ギャスケル夫人は「罪を犯したという事実は消え去ることはない」という厳しい思想を、マクベス夫人(Lady Macbeth)のせりふ「What's done cannot be undone」[22] が連想されるこの衝撃的な一文に凝縮させて、説こうとしているように思える。

「罪」の問題は、「良心」を持つ人間にとって重大な問題であることは言

うまでもない。ドストエフスキーを初め、世界の多くの作家がこのテーマを繰り返し扱ってきている。ギャスケル夫人も何度もこの人類普遍の問題を採り上げ、罪についての厳格な倫理観を作品の中で説いている。例えば、「リジー・リー」("Lizzie Leigh")の中のリジーは犯した罪を心から悔い、生涯を不幸な人々への奉仕に捧げるが、死ぬまで心の平安を得ることはないのである[23]。『メアリー・バートン』(*Mary Barton*)の中のバートンも犯した罪の呵責に苛まれるあまり、死んでしまうのである[24]。

ギャスケル夫人は「説教壇に立っている」(She too obviously takes the pulpit)[25]と言われるほど、自己が正しいと信じる倫理観を小説の中で説こうとする教訓癖がある。グレイスの不幸な生涯は、夫人から読者への真摯な警告であったと解釈されよう。

あまりこれに重点が置かれると読者の反発を招くかもしれないが、「乳母物語」では、死者だけでなく、生者の幽霊も現れる最後の場面の極度の恐怖と、グレイスの受けたショックを通して示されている「罪」の恐ろしさが巧みに相乗効果を挙げて、この警告は、即座に教訓とは気づかないほどに幽霊物語の中に消化されている。

ギャスケル夫人は罪への厳しい倫理観を持っている一方、ユニテリアン(Unitarian)派のひとりとして、神への揺るぎない信仰から、人間の絶対的存在価値を確信し、人々の愛の力に信頼を寄せ、愛を実践しようとしていた[26]。

そのために、夫人はこの短篇の暗い調子の中にも明るさを感じさせるように配慮を行っている。例えば「一家のお日さまのような」(like a sunbeam in any family)[27]愛らしいロザモンドが領主館の中を「小鳥のように軽やかに入って来ると、思い詰めた悲しそうな顔をしたファーニヴァルさまも、それに、冷ややかなスターク夫人も和やかな表情になられました」(The hard, sad Miss Furnivall, and the cold Mrs Stark, looked pleased when she [Rosamond] came fluttering in like a bird)[28]という描写は暗い館の中に明るい日光が差し込むような効果を与えている。また、乳母ヘスターを初めとして、罪の意識に苛まれるグレイス、また、「およそ人を愛したことがないように見える」(as if she had never loved or cared for any one)[29]冷ややかなスターク夫人まで館のすべての人々が行方不明のロザモンドを心配して捜し回ったり、また、ロザモンドが幽霊に誘い出されないように、カンヌキやよろい戸の窓をしっかり閉めてロザモンドを懸命に守ろうとしてい

る描写には、館の人々のロザモンドへの熱い愛情が感じられる。これらにより、ギャスケル夫人はこの短篇の中で罪の厳しさを説きながらも、人生に明るさを保ち得る愛の力が存在していることを伝え、人を愛する大切さを説こうとしていると言えよう。

読者は幼子ロザモンドの愛らしさ、そして、幼子への大人たちの愛に触れて、心温まる思いがし、人生に希望を持ち、生きる勇気を得ることになろう。これがこの短篇の魅力を増し、人気を保つ源のひとつとなっているように思える。

（５）

ギャスケル夫人がこの幽霊物語を単なる娯楽恐怖小説にするつもりがなかったことはディケンズとのエピソードにも表れているように思える。

ディケンズは、大団円で幽霊は子供ロザモンドだけに見えて、大人たちには見えないほうが恐怖感が増す、しかも、シェイクスピアの時代から幽霊は当事者だけに見えるものと決まっていると主張して、この部分を書き直すようにギャスケル夫人に提案した[30]。しかし、ギャスケル夫人は頑強にこれを受け入れなかった[31]。

その理由は、夫人がこの短篇で恐怖よりは罪の持つ意味と人間の愛のほうを重視したからであろう。大人であるグレイスが、経験も浅く人生の苦しみも知らない幼いロザモンドから幽霊の説明を受けて、この幽霊が、自分の若いころの高慢、嫉妬、憎悪、復讐の罪に汚れた自分の醜い本質であると知ったのでは、短篇全体が醸し出す異常な恐怖感は強まるかもしれないが、この短篇で伝えようとした罪についての思想は弱まってしまうように思える。グレイス自身が犯した罪の重大さをはっきり認識するには、自分の目で自分の幽霊を見る必要があるからである。そして、ロザモンドだけでなく乳母ヘスターも幽霊を目のあたり見るからこそ、幽霊の存在を確信し、その恐ろしさを理解し、ロザモンドを守り抜かなければ、という愛情が一層強まるからである。

（６）

「乳母物語」をヘンリー・ジェイムズ(Henry James)の『ねじの回転』

(*The Turn of the Screw*)[32] と比較すればギャスケル夫人のねらいが一層明らかになろう。

『ねじの回転』も子供に幽霊がまといつく物語である。ジェイムズは「乳母物語」から影響を受けた可能性もある[33]、と言われている。『ねじの回転』の「外枠」は、ダグラス(Douglas)という男性が、ある女家庭教師から預かった手記を友人、知人に読んできかせる、という形になっている。しかし、実質的には、語り手である女家庭教師が預かった兄妹を邪悪な幽霊から守ろうとして戦う経過を語っていく。これが小説の「内枠」になっている。

『ねじの回転』の中では、男の幽霊と女の幽霊がそれぞれ男の子と女の子を悪の道に引き込もうとしているが、幽霊の姿は子供たちと女家庭教師には見えるのに他のだれにも見えない。子供たちが幽霊の餌食になろうとしているのにもかかわらず、他のだれも気づかない[34]。恐怖は高まり、女家庭教師が孤軍奮闘する悲愴さも強まっていく。

幽霊が子供を誘惑しようとする点、また、語り手が子供を幽霊から守ろうとする点では、この２つの物語は似ている。しかし、『ねじの回転』では幽霊は語り手と子供にしか見えないが、「乳母物語」ではすべての人に見える。この違いは作者のねらいの違いを反映していると考えられよう。ジェイムズは小説という形式で徹底した恐怖を描こうとしているように思える。従って、当事者だけに幽霊が見えて、他人には全く見えず理解を得られないほうが、恐怖感、悲愴さは強まり、効果的であると言えよう。一方、ギャスケル夫人は幽霊を登場させて罪の問題を追究しながらも、人々への愛にも信頼を寄せて、小説を書いている。従って、恐怖度は犠牲にしても、すべての人に幽霊が見えるようにして、犯した罪の重大さを描き、また、すべての人が大切な子供を幽霊から守ろうとする愛情を描こうとしたと考えられる。

これは、小説の「外枠」と「内枠」の違いにも表れている。『ねじの回転』では、「外枠」と「内枠」にいる人々はそれぞれ全くの他人で、愛情を感じ合う関係にはない。「外枠」にいる人々はこの幽霊物語を聞いて余暇を楽しもうとしているだけである。ところが、「乳母物語」では「外枠」と「内枠」をつないでいるのが愛情深い乳母ヘスターで、その上、「内枠」の中の人々の間だけでなく、「外枠」の中に登場する年とった乳母とその乳母のお話を聞いている子供たちの間にも、愛情が通い、家庭的温かさが醸し出されているのが、記述されてはいないが、感じられるのである。

『ハウスホールド・ワーズ』の1852年度クリスマス特別号に掲載された、もうひとつの幽霊物語はエドマンド・ソール・ディクソン(Edmund Saul Dixon)[35]の「雑役婦物語」("The Charwoman's Story")[36]である。この2短篇を比べてみよう。

「雑役婦物語」は、現在は雑役婦として働いている女性が、昔、料理人としてある一家に仕えていた時、その一家の主人が幽霊になったということを、同僚の御者から告げられるという話である。

この物語を要約すると、この一家の主人は事業家で、事務所と自宅を持っており、この間を自家用馬車で通っていた。主人は脳溢血の後遺症の影響で歩き方が変わり、歩く時靴の片一方が奇妙にキュウーキュウーという音をたてるようになり、主人の姿が見えなくても、靴が軋む独特の音で主人がどこを歩いているかみなに分かるようになっていた。ある日、御者は主人を事務所まで送り、忙しい主人はその日は事務所に泊まり、翌日の午後御者が主人を迎えにいくことになった。その日の夜は激しい雨風になったが、深夜、御者は主人の靴の軋みを聞いて、主人が予定を変更してお帰りなのだと思い、出迎えようとしたが、独特の足音だけ聞こえて、姿が見えない。足音だけがドアを通って部屋へ入っていく。しかし、ドアにはすべてカンヌキがかかっているので、御者はこれは主人の幽霊だと直感し、主人は亡くなったのだと推察する。その翌朝、主人が事務所で死んだとの知らせが届き、御者は自分の勘が正しかったことを知る。

以上がこの幽霊物語の要約である。幽霊が姿を現さないで、音だけを立てる設定はユニークで面白し、「creak! creak!」という気味悪い擬声音が繰り返されるのも、恐怖心をそそるが、「乳母物語」の恐ろしさに比べるとものの比ではない。

また、なぜ主人が幽霊になったのか、その経緯が全く示されていない。さらに、この料理女と御者の間に恋愛感情らしいものがあったことや、また、主人一家の令嬢たちが親切な人らしいことは推察できても、生きた人間としての存在感があるようには描かれていない。肝心の主人についても、どのような人柄なのか全く描かれていない。自宅の構造についても、金持らしいとは分かるが、具体的なイメージが湧くような描写はない。ましてや、作者の真摯な思想は織り込まれてはいない。

幽霊物語としての恐怖度、また、小説手法、思想のどの点をとってみても「乳母物語」の方が数段優れた作品であることは確かである。

（８）

このように考察してくると、「乳母物語」は恐怖を最後の一点に集中していく優れた幽霊物語であるとともに、幽霊の出現原因を人間の普遍的問題「罪」と結びつけ、さらに、人を愛する大切さを語った、娯楽面と倫理面を見事に融合させた作品であると言えよう。

［註］

1) Antony and Peter Miall, *The Victorian Christmas Book* (London: Dent, 1978), pp.97-159.
2) Enid L. Duthie, *The Themes of Elizabeth Gaskell* (London: Macmillan, 1980), pp.139-40 によると，クリスマスに幽霊物語を楽しむ習慣はディケンズが定着させたという.
3) Charles Dickens (ed.), *Household Words*, 19 vols, with 1 extra vol. (rpt. Tokyo : Honnotomosha, 1989), VI, 1-36.
4) Elizabeth Haldane, *Mrs. Gaskell and Her Friends* (London: Hodder and Stoughton, 1930), pp.136-37.
5) J. A. V. Chapple and Arthur Pollard (ed.), *The Letters of Mrs Gaskell* (Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1967), p.81.
6) 足立万寿子「ギャスケル夫人の短篇小説『異父兄弟』にみられる愛」,『東京都私立短期大学英語英文学会研究紀要』, No.20 (1991), 20.
7) *The Works of Mrs. Gaskell*, with introductions by A. W. Ward, 8 vols, (1906; rpt. Hildesheim: Georg Olms Verlag, 1974)/The Knutsford Edition/, V, xx.

8) Elizabeth Gaskell, *Cousin Phillis and Other Tales* (Oxford: Oxford University Press, The World's Classics, 1981), "The Old Nurse's Story", p.54.

9) *Ibid.*, pp.40-41.

10) *Ibid.*, pp.55-56.

11) *Ibid.*, p.38.

12) *Ibid.*, p.42.

13) *Ibid.*, p.54.

14) *Ibid.*, p.55.

15) フィリップ・シドニ著，中田修訳『シドニ詩集』(東京教学社，1976年)，p.284.

16) 七罪源とは高慢，貪欲，嫉妬，邪淫，貪食，憤怒，怠惰である．

17) 『メアリー・バートン』，『ルース』(*Ruth*)，「リジー・リー」，「ブリジェットの呪い」("The Poor Clare")，「クリスマス、嵐のち晴」("Christmas Storms and Sunshine") など．

18) "The Old Nurse's Story," *op. cit.*, p.47.

19) *Ibid.*, p.55.

20) *Ibid.*, p.47.

21) *Ibid.*, p.56.

22) Alfred Harbage (ed.), *William Shakespeare: The Complete Works* (Baltimore: Penguin Books, 1969), p. 1131, *Macbeth*, V, i, 62-63.

23) 足立万寿子「*Lizzie Leigh* にみられる信仰」，『ギャスケル論集』，第3号 (1993), 60-61.

24) 足立万寿子「小説 *Mary Barton* にみられる Mrs Gaskell の労働者観」，『明の星女子短期大学紀要』，第9号 (1991), 93.

25) A. B. Hopkins, *Elizabeth Gaskell: Her Life and Work* (London: John Lehmann, 1952), p.89.

26) 足立万寿子「小説 *Mary Barton* における手法と作者の人間観」，『明の星女子短期大学紀要』，第10号 (1992), 33-34.

27) "The Old Nurse's Story," *op. cit.*, p.36.

28) *Ibid.*, p.40.

29) *Ibid.*, p.39.

30) Graham Storey, Kathleen Tillotson and Nina Burgis (ed.), *The*

Letters of Charles Dickens, VI (Oxford: Oxford University Press, 1988), 799-801.

31) John Geoffrey Sharps, *Mrs. Gaskell's Observation and Invention* (Fontwell: Linden Press, 1970), p.143.

32) Henry James, *The Turn of the Screw / The Lesson of the Master* (New York: The Modern Library, 1930). ヘンリー・ジェイムズ著，蕗沢忠枝訳『ねじの回転』（東京，新潮文庫，1962年）.

33) Edgar Wright, *Mrs. Gaskell: The Basis for Reassessment* (London: Oxford University Press, 1965), p.165.

34) 『ねじの回転』*op. cit.*, p.247 で言及されているように，幽霊は実際には存在しない，ただ家庭教師の幻覚に過ぎないという解釈も可能であるが，私はその反対の解釈を採りたい.

35) *Household Words, op. cit.*, extra vol., 103.

36) *Ibid.*, VI, 25-27.